

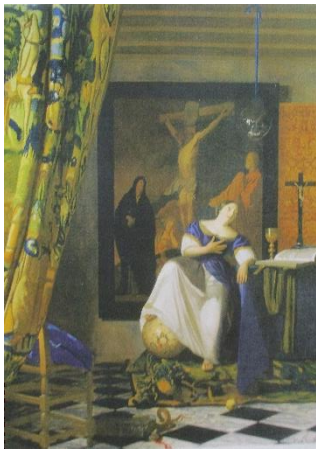
メトロポリタン美術館展 西洋絵画の500年

大阪市立美術館 21. 11. 13～22. 01. 16 国立新美術館（六本木） 22. 02. 09～05. 30

「メトロポリタン美術館」（通称Met）は、ニューヨーク・マンハッタンにあり、コレクションの幅が極めて広く、古今東西問わずあらゆる時代、地域、文明、技法による作品を収集している私立の美術館であることが特徴である。

本展は、当館が所蔵する西洋絵画コレクションから選り優れた作品の「65点」、うち46点は日本初公開を展示し、“西洋絵画の500年の歴史をたどる”という企画である。その内容は、「ルネサンス」（ラファエロ、ティツィアーノ）に始まり、「バロック」（レンブラント）、「近代」（マネ、モネ、ゴッホ）に至る西洋絵画史を、当館の主要作品とともに迎えるという恰好の機会である。

ヨハネス・フェルメール 《信仰の寓意》 1672～74年 油彩/カンバス



画伯が描いた現存する二点の「寓意画」のうちの一つで歴史画に分類される作品は、室内に一人ないし二人の人物が描かれている。

描かれたモチーフは、チェザレ・リーパの『イコノロギア』の「信仰」に関する記述 — 信仰は空色の上着を深紅色の服の上に羽織、月桂冠をかぶる女の座像で、足元に地球を踏みつけて、右手に聖杯を持ち、左手に本を置く。木の下にはキリストを意味する角石があり、その下には蛇が潰れて横たわっている—。

寓意画とはいえ、市民の住まいを舞台とした作品で、石の下敷きとなった蛇、地球儀を踏む女性はどう見ても場違いで、《絵画芸術》で見事に融合していた日常性と寓意性がここでは乖離し始めている。

ジョルジュ・ド・ラ・トゥール 《女占い師》



《女占い師》のテーマは、決して新しくは無く、すでに15世紀末からタピスリーに続いてフランドルの絵画に表され、その後カラヴァッジョ派により流行し18～19世紀まで描き継がれる。

この作品は、左端がおよそ25～30cm切断されて、上部が6cmほど付け足されたために、画面のつり合いが変わり、左のジプシー女の一部が切り取られ、若者が画面中央からずれてしまった。

その結果、人物の頭部が形作る円形の構成がより分かり易くなったとされるが、いずれにしても作品の魅力的な美しさを称えずにはいられない。